

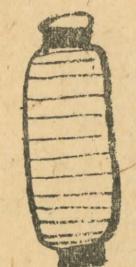
五郎にせよ、一生を役者といふものに浸しきつてゐる姿、役者以外には取り得のない役者になるために生れてきた役者、それが僕にはたまらなく、うらやましい感がするのだ。

新劇にも、こういふ役者らしい役者の芽生えが、もうばつぱつ生れてきていゝのはあるまいか。役者馬鹿と言はれるような役者が出てはじめていゝのではないか、新劇の面白さといふことも、つまるところは役者の面白さといふことなのである。脚本や、演出や装置が、役者の面白さの以前に問題になつてゐる間は、新劇は決して面白くはならないだらう。僕らが新劇の眞の傳統を創るといふことを自負するならば、なにはともあれ、役者がうまくなることが絶対に必要であらう。まづ理論より實際である。(俳優座)

## 惱みご夢

野澤喜左衛門

藝能人の  
ペーイジ



一ヶ月に三味線のバチが三本も擦り減るなどといへば「そんな阿呆なことが……」とお笑になるかも知れませんが、何分にもたゞきつける様にして彈くのですから、十日に一本の割で擦り減ります。

ところがこの撥の修理に使ふ象牙があります。象牙どころか三味練の生命とも云うべき絲があります。さらにその上、困つたことは文樂の三味線には後繼者があまりません。どれほど三味線があり、撥が何十本あつたとて肝心の彈き手がなければ文樂ももう終りです。昭和十六年からこちらへ、太夫への弟子入りはあつても、三味線への弟子入りは一人もありません。

どの藝ごとでも同じですが、文樂の三味線でも小さな時分からの修業をやかましく云はれます。わたくしも十三の歳からこの道にたづさはりましたが、その時でさへも「もう十三歳では遅い」と云はれた位でした。歳がいつくると關節が固くなつて、手の自由がきかなくなつてくるからです。それが最近の様に學校の様子が變り、世の中が遷つてき

ますと、いよいよ弟子入りが困難になるわけです。

三味線彈きはどこまでも女房役で、太夫の様に表立つて派手なところがないのが、本當の三味線ひきの姿なのです。太夫の長所は大いにひきたて、逆に短所は出来るだけこれをつゝみ隠すやうにするのが三味線彈きです。太夫がお客様から褒められれば、それが即ち三味線彈きがほめられたことになるので

す。これはまた決して舞台の上だけではなく、すべてに女房らしい内助の功が要る。その上後輩の太夫のよき指導者として、よい母でなければならぬ。

今日、時代が新しくなつて色々變つた傾向が見られる様になりましたが、わたくしもまた一つの夢をもつてをります。それは文樂の三味線から飛躍して、太棹に器樂としての獨立性を持たしてみたいことです。そして今、わたくしはこの「夢」に藝道のすべてを賭けてをります。

(文樂座)